

広報あしや
新春スペシャルインタビュー

コシノヒロコ Hiroko Koshino

緑豊かな木々に囲まれた奥池町。その中で無機質な鉄筋コンクリートの建物が自然と絶妙に調和した「KHギャラリー」。建物内に足を踏み入ると、日常では感じる事の出来ない特別な空間が存在する。特徴的な大きな窓に映る木々の景色とそこから取り入れられる自然光がギャラリー内と飾られた作品を照らす。

シトシトと雨が降る午後、ファッション界のカリスマ、コシノヒロコさんは優しい笑顔で話し始めた。「この辺りは雨の日の景色もステキでしょ。少し霧がかかっている幻想的で私好きなの。」

—ファッションデザイナーを 決意した出来事—

ピエール・カルダンとの出会い

私が文化服装学院に通っていた学生時代、小池千枝先生(高田賢三<KENZO>など有名デザイナーを育てた)にデザインの授業を受けていた時のことでした。絵を描くのが得意だった私に先生は、等身大の『ピエール・カルダンの作品』を描くように言われました。私が作品を描き終えた時のことです。突然ピエール・カルダンが教室に入ってきたのです。小池先生が仕組んだサプライズでした。ファッションデザイナーを目指す私にとって、ピエール・カルダンはもちろん憧れの存在でした。その人が突然目の前に現れたわけですから、若かった私にとってものすごい刺激になりました。それと同時に『これから真剣にファッションの勉強をして、私の作品を日本だけでなく世界に発表していく場をドンドン作っていく!』と決心した瞬間でもありました。

—世界へ初めて出ていくことが決まった1987年ローマでのコレクション。

その時、考え行動したこと—

芦屋へ移り住む

洋服の長い歴史を持つフランスやイタリアで、私が成功するにはどうすればいいか。真剣に考えたどり着いた答えが『都会と自然環境が一体となり四季を身近に感じることができる芦屋へ移り住む』ことでした。昔から日本人は自然と一体になって、四季

や自然と共存しながら生きていくことで、日本独特の文化が栄えていきました。季節ごとに家屋の中の設えを変え、食事や旬のものを上手にとり入れる。『四季がある日本の文化の良さを完全に理解し、自分の中へ取り込みながらクリエイションし洋服をデザインすることができれば、欧米でも通用するかもしれない。』そう思いました。

芦屋に住み、四季を感じながらデザインした洋服が、ローマのコレクションで大絶賛を受ける。

「ファッションデザイナーとして一番嬉しかったできごと。今から考えてもこの時の作品が今までで一番気合いをいれて作ったものでしたね。日本人がファッションの世界で活躍するには、欧米のデザインをまねても絶対に話題にはならない。私たち日本人にしかできないことをやらないといけない。私はピエール・カルダンと出会った時から、どうすれば世界に注目される作品を作ることができるかを考え続けて『四季がある日本独特の文化』に辿り着き、私の中で完全に消化し表現することで成功することができたと思っています。四季を感じることができる芦屋の土壌に『住む』ことが、私のクリエイションの根源になるものを作っているのです。」

—40年前自宅として建築した「HKギャラリー」での苦勞—

安藤忠雄設計の家を建てる

安藤忠雄さんは、私が大阪に住んでいたときからの飲み仲間でした。日本の四季を大切に独自のコンセプトで設計された彼の造る家が好きでした。ですから奥池町に家を建てようと思った時に安藤さんへお願いしました。「私、本当にお金はないんですけど、あなたがデザインする家を建ててほしい」と。そしたら彼に「わかった、まかしとき。車1台買うよりは、ちょっと高いと思うてな」と言われ、車1台分ぐらいなら大丈夫だと高を括っていました。でも実際は、その10倍くらいのお金がかかり、税理士さんからは「これは自殺行為に近いですよ」と言われました(笑)。かなりの借金をしましたから、家を建ててから20年間は全然お金がなくて利子も払えない状態で、本当に

大変でした。でも『私は、ファッションデザイナーとして絶対に成功する!』という強い目的意識がありましたから、これくらいの苦勞は全然いといませんでした。

実際にこの家に住んでからも大変で、奥池町の冬の寒さは厳しく、さらに安藤さんの建築する建物は鉄筋コンクリートだからとても寒い。家に帰ってきてからスキューエアに着替え生活していました(笑)。それでも私はファッションデザイナーだから、こんな厳しさも自分のクリエイションには最高に幸せな環境だと思っていました。自然に囲まれた非常にモダンで素敵な美しい空間で生活する。それは『自分の環境を大切にしたい』というファッションデザイナーとしての思想です。「洋服は人間の軀に一番近い環境でしょ。その人間に一番近い環境を作っていくデザイナーが自分の環境をおろそかにして良いものをつくれるはずがない。この環境の中で作ることで世界にたくさん作品を放出していったの。これが成功の基ですよ。」

—経営者としてのチカラも必要とされた人生—

ピンチの時こそ力は発揮される

ファッションデザイナーとして大成するために借金をしてまで家を建てたように、その後も周りの人から「そんなことしたら大変よ」と言われることばかり考えていました。でも私は全然大変と思わないで『これを成功させたら一段上のステージにあがれるチャンスだから頑張ろう。』その繰り返しの人生です。周りの人が反対し逆境に立たされた時に、その場から退いてしまいたいと思うこともあると思いますが、強い目的意識を持っていれば、その困難にも立ち向かえるのです。『夢は大きければ大きいほどいい、その為にはどんな苦勞があっても打ち勝つぞ!』って強い意志が持てるのです。私は、自分が最高の営業マンだと思ってデザイン提携の話を持って営業にも行きました。「会社でデザイナーを雇うと給料や福利厚生などでいろいろ大変ですよ。だから私にデザインさせてください」と。その頃ライセンスなんて発想は全然ありませんでしたが、そこから『ライセンスビジネス』に発展していきました。自分の手で自分